ぎのわんの歴史・文化遺産を歩く 其の4

「普天間飛行場③」

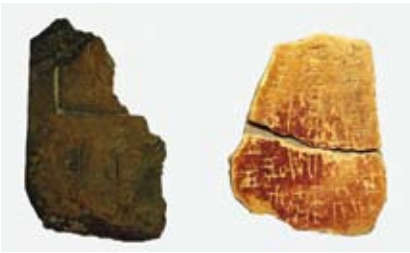
あらまし　市民の歴史・文化遺産として注目される普天間飛行場の「重要遺跡」を、前々月に続き紹介します。

神山テラガマ洞穴遺跡　古くから私たち宜野湾市の歴史をはぐくんできた字神山の聖地として、現在でも信仰の対象となっている横穴洞穴です。洞穴からは、沖縄の古代文字とも呼ばれる「線刻石版」が出土しています。

神山クシヌカー古湧泉　字神山にとって、戦前、家々に上水道のない時代は、古湧泉が大切な水源でした。それは、毎日の生活雑用水だけでなく、新年の若水・子供の産水・死者の浴水・麻疹を治す水などにも用いられました。

神山トゥン遺跡　字神山は、比嘉家に始まり、次いでその家を守るために各地域から人々が寄り集まって、トゥンで語り合い、やがてその場所が拝所となったと伝えます。現在、遺跡には戦前来の石祠の拝所が残されています。

神山後原ウシモー（闘牛場）跡　字神山ではモトウシモーと呼び、明治四十四年頃まで利用したと伝えます。沖縄の伝統的な娯楽文化である戦前の闘牛場跡が保存良く残る場所は本遺跡が県内で唯一です。



△神山テラガマ洞穴遺跡出土の線刻石板

△1950年代の神山クシヌカー古湧泉

問合せ：文化課
☎893-4430

△神山トゥン遺跡の石祠

△神山後原ウシモー跡

茶ぐわーゆんたく 103

米軍資料にみる1954年のキャンプズケラン

沖縄県公文書館で公開されている資料“Part “B” Master Plan, Okinawa, March 1954”（資料コード0000098410）は、1954年3月の時点での在沖米軍基地の「基本計画」を示しています。資料には米陸海空軍施設とその他の施設が「暫定」と「マスタープラン」とに大別されており、「暫定地域はマスタープラン施設の完了後に開放されることになっている」との記述も確認できます。

当該資料の中の宜野湾市にかかる米軍施設は、真志喜の「ホスピタルエリア」、宇地泊の「キャンプブーン」（それぞれ陸軍暫定施設）、そして「パイプライン」、「ズケランエリア」（それぞれ陸軍マスタープラン）、「普天間飛行場」（空軍マスタープラン）などが確認できます。なかでもキャンプズケランは「マスタープランエリアの現行施設」として比較的多くの紙幅が割かれており、基地内の地形、地質、インフラ整備、兵舎や娯楽施設等の建設についての記述が並んでいます。さらに「開発するに適している要因」の一つとして、「この立地条件で駐留する実戦部隊は那覇や嘉手納の主要などちらの空軍基地の防衛においてすぐさま展開できる」との記述が続き、ここからはキャンプズケランに駐留するとされる「実戦部隊」が、「沖縄を守る」ことを想定したものではないという点がただちに読み取れます。

資料全体を通して見ても、キャンプズケランにかかる人々の人権には全く言及されていない点も注目をひきます。そして54年7月以降、伊佐浜住民を中核とした土地取り上げ反対闘争が展開されていくことになります。（文責 清水文彦）

▲伊佐浜の田園風景（1955年頃）

『宜野湾市史』への問合せ
文化課 市史編集係（市立博物館内）
☎870-9317